

おくがき

自分が本書の評釋を思ひ立つたのは、たしか明治四十四五年の頃であつたと思ふ。爾來折々筆を執つて約五分一の稿を仕上げた。今だから屑く白狀するが、それは自己印象ばかりに立脚した、極めて自まゝな、頗る根據のない夢のやうなものであつた。

大正四年の春であつた。庭の楓が牙のやうな若芽を吐いて、櫻の蕾が赤い豆粒のやうに脹らんでゐた。長閑な日影を浴びて、何心なく、机上の大槐秘抄を手に取ると、

昔は竹の臺の筍おひたれば、藏人御盤持ちておりて、御厨子所に賜ひてゆでてこそ参らせ、  
せて候へ。承平の御門、朱雀院におはしますに、天曆の御門行幸せさせ給ひて、池の魚を取らせてこそめしたる由云々。

とあるのが目についた。あゝ、これだ。現代文學はとにかく、古文學は是非とも、その製作された時代の文化を透して見なければ、その事實の真相がわ

からぬ。真相がわからなければ、たしかな鑑賞も出来ない。闊然大悟といふ程でもないが、こゝにふと氣が付いて、更に前例のない破天荒の形式で、この評釋に着手する事とした。既成の原稿を破棄することは、苦痛だったが、又一面に新しい光明に接し得ることを、心窃に喜んだ。

自分は極めて多忙な體である。筆硯に親しむ餘暇といつては、いくらもない。その大正十年の夏に上巻の發行を見るに至つたのは、寧ろ早い位だ。幸に學界における先輩朋友間の賞讚、江湖の喝采は、實に豫期以上であつた。随つて下巻の發行を渴望される聲は、今に耳に絶えない。

昨年九月一日の大震火災の際には、丁度二百二十九段の評語が面白くないので、訂正中であつた。家が船のやうに動く、障子ガラスがバリ／＼こはれる。地震は大きいと直覺したが、まゝよと腰を据ゑて、再び筆を援つた。とかく机が跳るので、骨折つて書いた爲、下手な字畫が却て外のよりも明確であつたのも可笑しい。一時あらゆる機關が停止したので、印刷の進行

は、茲に一頓挫を來した。

遷延また遷延、豫定から一箇年もおくれて、遂に本年に入り、この五月に漸く全部校了となつた。餘り根をつめて、近く眼中二回の出血を見たので、どうかとあやぶんだのが、幸に成功したので、自分ながら嬉しい。

しかし、虚心坦懷に本書の成績を點檢すると、羞かしいほど、頗る物足らなさを感じる。まだ／＼いひたい事書きたい事が、山ほどあつた。機會のあり次第、再三にも再四にも、訂正増補を怠らぬつもりである。

庭前の櫻は既に散つて、今が若葉の盛りだ。去年一緒に、京の大原の奥に若葉の薫をめであつた萩野老兄は、この成功を見ずに逝つてしまつた。ただ本書の序文のみが、その忘形見となつた事が、殘念である。

大正十三年五月

著者しるす

大正十年六月廿一日上卷印刷  
 大正十年六月廿六日上卷發行  
 大正十一年四月廿九日下卷印刷  
 大正十一年四月廿四日下卷發行  
 昭和元年七月二日增訂發行  
 昭和元年七月二日增訂發行  
 昭和元年七月二日增訂發行



發行所

【振替貯金口座東京九九一番】  
 東京市神田區錦町一丁目

株式會社 明治書院

電話 神田 (25) 三三三三  
 四四七七  
 四四八八  
 四四九九

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

著者 東京市小石川區白山御殿町百十番地 金子元臣

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 三樹彰

印刷者 東京市牛込區榎町七番地 早坂善太郎

印刷所 東京市牛込區榎町七番地 大日本印刷株式會社榎町工場

枕草子評釋合本

定價金七圓五拾錢

七五〇一

御歌所寄人・國學院大學教授

金子元臣先生著

☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒	☒
雨月物語新抄	津保物語	古今和歌集	源氏物語	枕草子	古今和歌集通解	枕草子通解	萬葉集評釋	古今和歌集評釋	源氏物語新解	和朗詠集新釋(改修版)
全四六册判	全四六册判	全四六册判	全四六册判	全四六册判	全一新菊判	全一新菊判	第一二册判	全菊一册判	全四六册判	全菊一册判
定價金七拾錢	定價金六拾錢	定價金壹圓貳拾錢	定價金壹圓參拾錢	定價金壹圓四拾錢	定價金貳圓五拾錢	定價金參圓五拾錢	定價各金四圓五拾錢	定價金六圓八拾錢	定價各參圓八拾錢	定價金六圓

東京株式會社明治書院發行

914.3  
Ka53  
2

